

資料・統計

2006年病理部業務統計

Annual Report of Pathology in 2006

小柳 実 落合 広美 宇佐見 公一 川崎 幸子
 川口 洋子 泉田 佳緒里 佐藤 由美 北澤 綾
 阿部 康彦 栗原 アツ子 西村 広栄 木下 律子
 弦巻 順子 畔上 公子 中島 亜希子 太田 玉紀
 本間 慶一 根本 啓一

Minoru OYANAGI, Hiromi OCHIAI, Kouichi USAMI, Sachiko KAWASAKI,
 Youko KAWAGUCHI, Kaori IZUMIDA, Yumi SATOU, Aya KITAZAWA,
 Yasuhiko ABE, Atsuko KURIHARA, Kouei NISHIMURA, Noriko KINOSHITA,
 Junko TSURUMAKI, Kimiko AZEGAMI, Akiko NAKAJIMA, Tamaki OHTA,
 Keiichi HOMMA, Keiichi NEMOTO

要旨

2006年(1月~12月)病理部業務統計をまとめた。総依頼件数は25,383件で、内訳は病理組織診断12,570件、細胞診断11,753件、電子顕微鏡検索4件、病理解剖25件であった。細胞診、組織診を合わせた術中迅速診は1,396件、院外受託は1,908件であった。業務件数は作製ブロック数49,590個、各種染色標本99,034枚であった。受け入れた研修生、実習生は総数23名であった。

2006年は総件数では前年比約10%増であった。免疫染色は前年比22%増の14,942件、また乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的検索HercepTestは51.4%減の302件となった。

はじめに

2006年病理部業務統計を報告する。医療の高度化、癌治療の進歩に伴い病理部に対する要望も多岐にわたり、より高度で詳細な病理学的検索、あるいは情報の提供が求められるなかで出来る限り努力をしてきた。

また当院の理念でもある地域協力、人材の育成と言う立場から研修医、医学部学生、検査関連実習生を受け入れ、さらには中国からの研修生の受け入れ等可能な限り対応をしてきた。

2006年病理部業務件数(表1)

受付依頼件数は昨年に比し9.9%増加で総依頼件数は25,383件であった。組織診は12,570件で、細胞診は11,753件であった。院外受託は1,908件で、13.7%の増加であった。今回の院外受託増加は、ほ

ぼ新設されたプレストセンターからの依頼増であった。施設は12施設で、県立病院4施設(加茂病院、津川病院、坂町病院、吉田病院)、その他8施設であった。術中迅速診断は組織診、細胞診合わせて前年比10.5%増の1,396件で、組織診は前年比10.4%増の541件(延べ件数)、細胞診は前年比10.6%増の855件(延べ件数)であった。術中迅速は日常業務と併行、あるいは中断して、数十分で標本作製から診断まで行わなければならない術式に影響する重要な業務の一つである。しかし、術中迅速細胞診は、処理から染色、鏡検までマンパワーをより要するため、各手術室の依頼が重なる場合、日常業務の大きな負担となっている現状がある。昨年平均9%の減少を示したものの、今回は、一昨年以上に増えている。今後は現状の精度を下げる事のない効率化の方法、またどうしても迅速でなければならない必要性を臨床側と考えていかな

ければならない。免疫染色は前年比22%増加の14,942件、一方乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的検索Hercep Testは51.4%の減少で302件となった。この減少は、一時Hercep Testを受ける事の出来る病態を限定したためである。その分その代用としてc-erbB-2 (HER2) の免疫染色が263件で86.5%増加している。

これら遺伝子、免疫染色等の件数増加は臨床からのより詳細な情報の提供が求められている一つの現れであると思われる。

2006年病理検査科別依頼件数 (表2)

組織診では12,570件中、予防センターの依頼が4,650件で37%を占めた。消化器内視鏡が大半であったが、乳腺外来の生検数も年々増加し、前年比約42%増であった。本院件数では例年のごとく外科の件数が一番多く、続いて婦人科、皮膚科、泌尿器科の順であった。院外受託は1,565件で全体の12.5%を占め、県立加茂病院、県立津川病院、プレストセンターの3施設で73%を占めた。

細胞診でも例年のごとく産婦人科が11,753件中5,595件で半数近くを占め、続いて泌尿器科、予防センター外科、本院内科、外科、呼吸器外科の順で依頼が多かった。院外受託は昨年同様343件で全て県立加茂病院の依頼であった。

電顕依頼は4件で、前年比55.6%減少であった。また病理解剖依頼は25件で、前年比11%減で、内科が主体であった。

以下、2006年病理組織部位別件数 (表3)、2006年細胞診成績 (表4) は業務内容をより把握していただく為、件数は延べ件数を計上する。ただし今回は、オーダーリングシステム導入に伴い、4月より新システムに変更になった。その為前システムと新システムの統計業務の分類が違っており、延べ件数が上手く出せない項目も合った。

2006年病理組織部位別件数 (表3)

部位別件数では延べ件数14,995件中消化器系が例年通り半数近くを占めた。生検材料でも消化器系が圧倒的に多く、続いて骨髄、婦人科系、泌尿器科系、乳腺、呼吸器系の順で、手術材料ではリンパ節、消化器系、皮膚科系、婦人科系、乳腺、呼吸器系、骨・軟部等の順であった。総件数では乳腺が、前年に比し増加傾向大であった。迅速材料は延べ件数で前年比12.2%増加し597件であった。リンパ節の割合が241件と大きく、うち外科、皮膚科系のセンチネルリンパ節が167例で69.3%を占めた。他部位では女性器、消化器系、骨・軟部の順に多かった。

2006年細胞診成績 (表4)

件数は延べ件数13,334件であった。婦人科系が前年比12.2%増加で6,833件と半数近くを占め、続いて尿、胸腹水、乳腺、喀痰、気管支・肺の順であった。乳腺は前年比14.1%増の1,326件であったが、判定基準が異なるため別計上した。術中迅速細胞診は906件で前年より4.3%減少した。内訳は胸・腹水が769件で圧倒的に多く、ついで肺・気管支の件数が目立った。なお迅速細胞診は現在通常の保険点数しか認められず、負担の大きい割に評価が低く、今後の保険点数増を期待したい。細胞診陽性 (Class IV、V、悪性疑い、悪性) は1,449件で10.9%であった。一方目的とする細胞がほとんど見られないような標本で検体不良、及び不適正としたものが538件で約4.0%あった。前年に比し205件増加し、割合も1.3%増加した。前年同様乳腺で多く、35.0%みられた。前年比約10%増加したが、乳腺の判定基準では10%以下が望ましいとされており、また検体不適正は再検査など患者への負担増につながることもあり、臨床側とも協力の上で採取法等総合的に原因を検討し、より一層の改善に努めて行きたい。

おわりに

2006年病理部業務統計を報告した。総依頼件数だけでなく、院外受託、迅速、免疫染色等各依頼も約10~20%増加した。内容の濃い業務で大変な状況ではあるが、精度を落とさず今後も臨床側の要望にできる限り応えられるよう努めていきたい。

最後に関係各位のご協力に感謝するとともに、今後ともよりいっそうのご協力をお願いしたい。

表1 2006年病理部業務件数

		総件数	組織診	細胞診	電子顕微	病理解剖	遠隔診断
依頼件数	がんセンター	17,550	6,355	10,135	4	25	0
	がん予防センター	5,925	4,650	1,275			
	院外受託 ¹⁾	1,908	1,565	343			
	術中迅速(再掲)	1,396	541	855			
(依頼合計)		25,383	12,570	11,753	4	25	0
業務件数	ブロック数	49,590	48,575		40	975	
	切り出し数	71,300	70,325			975	
	普通染色	76,003	55,891	19,127		985	
	特殊染色	7,711	6,352	1,254		105	
	免疫染色 ²⁾	14,942	14,129	599		214	
	ISH染色 ³⁾	55	55				
	Hercep Test ⁴⁾	302	302				
	FISH ⁵⁾	21	21				
(染色合計)		99,034	76,750	20,980		1,304	
実習生	研修医	8	新潟大学医学部 新潟医療技術専門学校 7、北里保健衛生専門学校 2、新潟大学 2 中国黒龍江省医師				
	医学部学生	3					
	臨床検査学生	11					
	中国研修生	1					
職員	病理医	3.1	常勤 3.0、非常勤 0.1(隔週 1日)				
	細胞検査士	9					
	臨床検査技師	2					

- 1) 院外12施設(県立病院5施設、その他病院・医院7施設)
- 2) 免疫染色では130種類以上の抗体を使用
- 3) In Situ Hybridization (ISH) によるEBウイルスの検索を行った
- 4) 乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学法での半定量的検索を行なった
- 5) FISH法による乳癌のHER2遺伝子の検索

表2 2006年病理検査科別依頼件数

	総依頼件数	組織診件数(%)	細胞診件数(%)	電顕件数	病理解剖
内科	1,348	452 (3.6)	877 (7.5)		19
内科(がん予防 ¹⁾)	4	1 (0.0)	3 (0.0)		
神経内科	1	0	1 (0.0)		
精神科	0	0	0		
小児科	613	314 (2.5)	295 (2.5)		4
外科	2,171	1519 (12.1)	650 (5.5)	2	
外科(がん予防 ¹⁾)	1,607	335 (2.7)	1272 (10.8)		
整形外科	313	283 (2.3)	30 (0.3)		
脳神経外科	92	39 (0.3)	51 (0.4)	2	
呼吸器外科	887	467 (3.7)	420 (3.6)		
心臓血管外科	0	0	0		
内視鏡	474	86 (0.7)	388 (3.3)		
内視鏡(がん予防 ¹⁾)	4,314	4314 (34.3)	0		
産婦人科	6,833	1238 (9.8)	5595 (47.6)		
耳鼻咽喉科	400	238 (1.9)	162 (1.4)		
口腔外科	0	0	0		
眼科	2	2 (0.0)	0		
皮膚科	902	899 (7.2)	3 (0.0)		
泌尿器科	2,436	816 (6.5)	1618 (13.8)		2
放射線科	47	2 (0.0)	45 (0.4)		
麻酔科	0	0	0		
院外受託 ²⁾	1,908	1565 (12.5)	343 (2.9)		
総計	24,352	12570 (100.1%)	11,753 (100%)	4	25

- 1) (がん予防) : がん予防総合センター
- 2) 組織診は主に消化管生検材料、骨髄、乳腺の受託
細胞診は県立加茂病院より尿、喀痰をはじめ材料は多彩

表3 2006年病理組織部位別件数（※総件数、生検材料、手術材料は延べ総数を計上）

	生検材料	手術材料	迅速材料	総件数	2004年総件数	2005年総件数
頭頸部	98	78	5	181	332	259
呼吸器系	134	201	23	358	483	360
乳腺	567	510	6	1083	876	904
皮膚	172	724	4	900	830	813
上部消化管	3123	579	29	3731	3873	3696
下部消化管	2481	288	2	2771	2836	2600
消化器系	139	131	45	315	354	349
骨・軟部組織	51	162	39	252	302	123
造血器系	848	19	1	868	949	969
尿路系	269	125	23	417	393	329
女性器	952	361	61	1374	1327	1403
男性器	415	58	15	488	560	517
リンパ節	96	1466	241	1803	1,828	1,684
その他	258	93	103	454	116	92
(合計)	9,603	4,795	597	14995	15,059	14,098

表4 2006年細胞診成績（*延べ件数を計上）

	件数	迅速	Class I	Class II	Class III	Class III a	Class III b	Class IV	Class V	検体不良	所見のみ
頭～頸部	48		3	35				2	3	5	
甲状腺	351		3	244	22			10	41	30	1
気管支・肺	592	127	3	262	21			30	274	2	
喀痰	702		11	596	25			22	46	2	
肝・胆・膵	38	1		21	5			2	7	2	1
子宮腔頸部	5,170		503	4,171	38	373	18	26	37	2	2
子宮体部	787		27	716	10	6		6	17	5	
子宮断端部	861		314	497	10	21		3	16		
外陰部	15		1	11	1				1	1	
骨髄	17		2	12	1			1	1		
腫瘍	22		1	3	1			1	10	6	
リンパ節	94	2	3	23	1			1	50	16	
心嚢液	10	2		2					8		
脊髄液	406	1	7	327	18			8	44	1	1
胸水(洗浄液含)	300	117	1	211	3			4	81		
腹水(洗浄液含)	826	652	1	667	15			9	134		
尿	1,759	3	60	1312	109	1		66	205	2	4
その他	10		2	7	1						
(合計)	12,008	905	942	9,117	281	401	18	191	975	74	9

	件数	迅速	検体適正 (良性)	鑑別困難	悪性疑い	悪性	検体不適正	所見のみ
乳腺 ¹⁾	1,326	1	534	45	47	236	464	0

1) 乳腺は判定基準の変更で別計上